

伊勢日記私注(四)

―心ざし深き人―

松原輝美

第五段

(兄)・・・(男)

この人のはらかなる人、「なかか参りたまはぬ。・・・人の...

(き)

つらさを出でて思すか」とて、

二、ひたぶるに思ひなわびそ古さるる人の心はそれぞ世の常。

返し、

(も)

(け)

二、世の常の人の心をまだ見ねば何かこのたび消えぬべきものを。

(かく言ひけるほどに、めぐる年の神無月になむありける) (兄)

・(いと) (に) (りぬる) (詠みたり)

「御心の・・・つらければ、吉野へなむまかる・・・」とて、

ける)

(ぶる)

三、ひたすらにいとひはてぬるものならば吉野の山に行方知られじ。

(かへし)

返歌・

三、わが宿と頼む吉野に君し入らば同じかざしをさしこそはせめ。

(今は) (にあひに)(かむ) (吉野とは) (人の心つ

・・・維摩会へ・・・ゆく・とて・・・言ふなりけり。・・・

らして言ふにはあらざりけり)
.....

【通解】

本段は、一部、伊勢にとっては、「はじめての人」である仲平を話題にしつゝも、いつか彼を圏外に置いて、前段で登場した仲平の兄時平と伊勢の交渉を語る段である。その前半は、時平から、里邸に下がったまゝ参内しない伊勢に、それは、仲平の冷たい仕打ちゆえの長居ではないのかと慰めの歌を贈り、伊勢もこれに応じている。そして後半は、時平が、伊勢のつれない応接を怨じて、そんなに私をお嫌いなら、私は世を捨て、吉野へでも姿を消してしまいたいものですと愁訴の歌を届け、伊勢がまた、これに応じている場面である。

後半部のはじめに、三類本では「かく言ひけるほどに、めぐる年の神無月になむありける」とあるから、前半は、物語の時間の上で言えば、前の段につながって、寛平五年（八九三）の秋、そして後半は、その翌寛平六年（八九四）の、これもまた秋である。

ところで、寛平五年の先の秋に、「ひたぶるに思ひなわびそ」「世の常の人の心をまだ見ねば」と贈答してから一年、この年の秋に至って、「ひたすらにいとひはてぬる」と詠む、その歌い口は同じ風でありながら、贈答のその内質は大きく変っている。表には愁訴と擲論の

贈答と見えながら実は互いに戯れ言の応酬を楽しんでいるのである。一年の時間の経過が、二人の仲を大人にしたのである。

伊勢も、そして時平もまた、二人共に「あな幼な」を関心の中に置く境涯からは、既に大きく越えていた。大方の評者の言うように、「伊勢集」は伊勢の側に立った書き方ばかりをしている訳ではない。作者は、案外に公平なのである。

なお、本段は既に『平安文学研究・第77輯』（京都・平安文学研究会・昭和62年5月刊）に発表済みであるので、「注解」と「評」の項は、これを省略し、本紀要では、物語の展開を読むに必要な「通解」のみを掲げる。「通解」の口語訳は前段に続けて、西本願寺本系統の本文で付けることとする。

（二度とは許すまいと心決めた）仲平様の、兄にあたる時平様が、（主人伊勢の里に便りを寄こされて）「なぜに参内なさらぬ。あの弟のやつ心のつれなさを、里にゐて嘆いておいでか」と書いて、一途に思い苦しまないように。女が棄てられる男の心はこれが普通なのです。

（と慰めてございました。）それへの返歌に主人は、普通の男の心なんて私はまだ経験がありませんのでどう仕様もありません。とにかくこのたびのショックで消え入ってしまいたいよう

な思いでございます。

(と詠んだのでございます。)

(それからどの位の月日経ってのことでございますでしたでしょうか、

やはり)この(兄にあたる)時平様が、(便りをお寄こしになって)

「あなたの御心のつれなさがひどく身にこたえますので、(このまま

都にいるのも切なうて)吉野へ身を隠してしまいとうございます」と

おっしゃって、

もし、一途に私を嫌がりなさるようなことであるのなら、私はこの

まま吉野山に隠遁して行方知らずになってしまいたいと思っております。

(と訴えておいでございました。)

それへの返歌は、

私こそ隠遁の地として最後の楽しみにしている吉野山に、あなた

方が入ってしまわれるなら、仙人が頭につける髪挿を二人でつけて

共に生活しましょうよ。

(と主人伊勢は言っちゃったものようございました。)(どうやら、

時平様の訴えはご本心からのものではなく)維摩会に見参されるのを、

吉野へとお戯れになったようございました。

第六段

……(この人の妹におはしませよ) (ときこえけ

かかるほどに、……御息所……

るは、御葉の騒ぎにて、(ましくなむし) (る)(宵に)

……悩み……たまひければ、……集

(に)(この人の聲になりにし男君の) (者)

り・さぶらふを、……蔵人といふ人して、

(主人おはせよ)「下におはせよ」……と言はせられた

……あからさまに……参りたまへ。物聞えむ) (ひけり・

はじめの男……「下におはせよ」……と言はせられた

……(返り言しげし……(古言)(なむ)(ひや

ば、……憂しと思ふ心をしばしといふ心……言はせ

りける)(されば、男、)

たれば、……

一四、宵の間にはやなぐさめよ石の上ふりにし床もうちはらうべく。

(を)

(と詠みたりける。女)

・・・・・返し、

(あれ)

一五、わたつうみとなりにし床を今さらにはらはば袖や沫と消えなむ。

(ければ) (々・宵の目さましてなむ) (る)

と言ひたるを、人・も・・・・・あはれがりけり。

【通解】

本段は、伊勢にとっては、「はじめての人」である仲平の兄時平と伊勢の交渉を語った前第五段——その経緯については、前段で断わった通り、『平安文学研究・第77輯』に発表の拙稿に於いて詳しく述べて来た——に続いて、その「はじめての人」仲平との訣別を語る段である。

なお、本第六段も既に、これは『平安文学研究・第78輯』（京都・平安文学研究会・昭和62年12月刊）に発表済みであるので、その取扱

いは前第五段と同様にする。

あれは、主人伊勢が、時平様と吉野山の歌など取り交すことのある年の暮あたりだったかしら、御息所の温子様にはご不例のことがおありになって、（方々が御病床に）待っておりました。（そんな時）はじめてのあの方が、（紀の）蔵人という女房を使い立てて、（主人伊勢の許に）「私の曹司においでなさらぬか」と言って寄せされたのでした。

（主人はそれに）「ほんの一刻でもいゝ、あなたに裏切られて沈んでおります私の心を慰めたいのです。（ほかのお方はその後で・・・・）。（そんな古歌の）趣きを（認めて、お断わりの返事を）持たせたのでございました。（ところがあの方は押し返して、こんな歌を届けて来たのでございます。）

そんなにおっしゃるのであれば、宵の間に、辛いと言われるあなたの心を早く慰めてしまってください。あれからずいぶん御無沙汰をしていました寝床の塵を払っていただくためにも。

それへの返し（に主人は）
荒れる海ではないが、あなたに忘れられ見限られて、荒れ果ててしまった私の寝床でございますのに、それを今更、あなたにお出で願わうと払い清めたりしましたならば、塵を払う私の袖は、海の沫と

なつて消えてしまふことでございますよ。

と言つてさしあげたのでございました。その返り言(に温子様の許に侍つておりました)方々は、(みな宵居のまどろみから覚めて、交々に)共感の声を惜しまなかつたそうにございます。

第七段

・ ・ ・ (せ・) (そひて) (いと) (くあり) ・ ・ ・

また人数とも思はぬに、 ・ ・ ・ 心ざし ・ ・ ・ 深き人ぞそひて言ひ

・ ・ ・ (男) (ざりけれ)

ける。 ・ ・ ・ 文おこすれど、返りごともせね ・ ・ ・ ば、

・ ・ ・

一六、山賤はいへどもかひもなかりけりこひこそそらにわが答へせよ。

・ ・ ・

なほ返りごともせざりければ、「いなとも、いかにとも、わが君

・ ・ ・
わが君」とせむれば、

一六、(なせとも)

一七、いかにせむ言ひ放たれず憂きものは身を心ともせぬ世なりけり。

とばかりいひて、やみにけり。

(て ・ ・ ・) (世に) (大臣も流されたまひける。

かくいふほどに、 ・ ・ ・ 騒ぎ出で来て、 ・ ・ ・

聳にて) (より ・ ・ ・) (その人も流され)

・ ・ ・ 兵衛佐なる人、解かれて但馬介になり ・ ・ ・ にけり。

(たよりのありければ、) (・ ・ ・ 思ひて ・ ・ ・) (ここ)

・ ・ ・ 近くてはさもおぼえで止みにしを、かく遠

(なりたまふ ・ ・ ・) (にやりたりければ、)

く流されにたるがあはれなることといひたる ・ ・ ・ 返り

(かくなむ)

ごとに……。

一七、 (瀬を)

一八、かけて言へば涙の川の水脈早み心づからやまたはなかれむ。

【通解】

(時平様のことはともかくとして、弟君の仲平様には、お別れと申しましてよい文を差し上げたりすることのありました、そんな頃、主人伊勢の許には)それは人並みの男とも思っておいではないお人でございましたけれど、またまた深い情愛を見せて、まるでぴったりくっつくようにして執拗に求愛するお人が現れて参ったのでございます。(その人は、情愛のたけを尽した)手紙を寄こすのでございますが、(主人は)返事も致さないものでございますから、(こらえ切れなくなつたので)ございましょう、こんな風に訴えて参ったのでございます。

大空に満ち溢れる程のわが思いも、山賤に等しいとるに足りない我が身のゆえに聞き届けてはもらえませぬ。せめては、空に満ちる我が恋情よ、笏となって、私の呼びかけの哀切に答えては呉れないだらうか。

(それでも、主人は、)依然として一顧もお与えにはなりませんでした。(そこで、そのお人は)「いやとおっしゃるなり、なじつてくださるなり、ともかくも何か言って頂きたい」と、ひたすらに主人の返事を懇請して参ったのでございます。(そうまで言われて、然し、主人は、)

どのようにあなたにお答えしたらよいのでしょうか。言葉にそれと言いつけることはかなわないのです。恋とは憂きもの、わが身ひとつも思いのままにならないのでございますから。

と言うばかりで、そのお人とのことは終ったかに承りました。ところが、思いも設けぬことに、(皆さまもご存知の)道真公筑紫へご配流の事件が起つて参りまして、(公の縁辺であった)そのお人も、兵衛佐より左降されて、但馬国に流されて参りました。(そのお人が)続いて京にいるのならば、依然として人数とも思いはしないのですが、今は(お舅の罪に連なつて)このような左遷の憂き目に逢い、遠く但馬国に流されてゆくその哀れを、主人も、不憫の御ことと言ひ贈つたのでございます。(そのお人は、)それへの返り言に(こんな歌を寄こしたそうに)ございます。

お心にかけて優しい便りを頂きましたので、押え切れぬ私の涙の川は滝つ瀬となり溢れ出てまいります。それにつけても、そんな優しい方と結ばれることもなく、異郷に流れてゆく身を思えば、

我知らずまたも泣かれてしまうのでございます。

【注解】

○また人数とも思はぬに、心ざし深き人ぞそひて言ひける。 物語

の冒頭の、伊勢の初宮仕えのそのはじめから、或は、再出仕の時の日数を重ねたその頃から、「心ざし深き人」としてあった仲平・時平兄弟に次いで、伊勢に恋情深き男の出現を語る三たびの段である。「また」は、「心ざし深き人ぞそひて言ひける」に係る。その人は「添ひて（副詞）言ひける」という。びったりとくっつくようにして、執拗に言い寄って来るのだが、伊勢はその男を歯牙にもかけないでいる。

「また」は、「人数とも思はぬに」にも係ってゆく文脈である。前第六段の一四・一五番歌の贈答を通してみた通り、臆面もない仲平の執拗な誘いに対するに、伊勢は、その仲平の厚顔と強引に拮抗する措辞の大仰をもって、彼の誘いを手もなくいなして行った、その対応のかたち——これについては、『平安文学研究・第78輯』に詳述した——の、こゝは散文の詞書をもってする、その再現である。

それゆえ、この段は、片桐氏の言われたような、「今まで述べて来た藤原時平・仲平兄弟の話とは全く異なる」訳でもなく、ましてや秋山氏の注されたような「これまでの『伊勢日記』の文脈からすると断絶がある」という訳でも決していないのである。その意味で言うと、並列追加を

意味する「また」を落している定家筆本系統の三類本の本文は唐突である。更に、三類本は最初に掲げた一類本との校異でみる通り、「山賤は」の一六番歌の男の歌をも落して、詞書部分は簡潔を極めて、一類本の一七番歌（三類本では当然、一六番歌となる。）を一六番歌に代る男の哀訴の歌として、この条を終っている。しかし、一七番歌を、女から人数にも入れてもらえない男の哀訴の歌とみるには一首の解釈に不自然さが残るし、それにもともこの歌は、伊勢本人の歌であったものである。それは、『後撰和歌集』恋五・937番歌に、

親の守りける女を、いなせ否とも諾せとも言ひ放てと申しければ

いなせ否諾とも言ひ放たれず憂きものは身を心ともせぬ世なりけり

とあるものである。初句は一類本と異っており、（二類本は「いなせとも」とある。「を」は「せ」の誤写であろう。三類本は後撰集歌と同じく「いなせとも」とある。）また、作者記名をも落してはいるが、直前の936番歌に「伊勢」と明記されており、『後撰集』の撰集の形では、同作者の詠を並記する場合はみなこの形をとっているから、937番歌も伊勢の歌と認めてよからう。

「親の守りける女を」というその詞書に信を置けば、『伊勢集』冒頭の物語的部分のはじめに、「親いと愛しうして、男などもあはせざりけるを」（三類本）とあった、それに時間の上で連なってゆく伊勢の、これは温子後宮出仕以前の、その少女時代の一時期の挿話を語っ

た歌柄ということになるか。「否」は不承知、「諾」は承知。「不承知とも承知とも、そのはっきりした返事を伺いたい」と言ってきた

男に対して、下の句の優婉はさりながら、「辛いものは、親に監視されてこの身、思いのまゝに振舞うことはかないませぬ」と男の言葉

葉を鸚鵡返しに言うその稚なさに乙女の至純をみる佳句である。『伊勢集』の作者は、その至純を執念き男の求愛に対する強かな拒絶の意志に転封して、物語のこゝの文脈に取り込んで来たのではないか。その

前の一六番歌、「山賤は」の歌が、片桐氏の示唆される如く、『古今和歌集』が所収する伝承歌を踏まえての創作であろうことをも含めて、この段の前半は、恐らく少女期の伊勢の、この「否諾とも」の歌を核にして延展開成された作者創作の一段であらうと思われる。

その意味で、一・二類本の本文はよく分かる。一類本は前掲の校異に譲って、二類本の本文をあげると次の通りである。(歌番号は、伊勢の再出仕の直前に、他の本にはない「伏見」での詠が入っているの

一類本より一番多くなる)
また人数ともせぬに、心ざしいと深き人そひていひける。文お
こせけれど、返事もせざりければ、

二七、山賤はいへどもかひもなかりけり山ひこ空にわが答へせよ。

なほ返事もせざりければ、あかねとけいせよ(こゝは難解である。
稿者)ともいひはなてと言へりければ、

一八、否を。(「諾」の誤写か)とも言ひも放たず憂きものは身を心ともせぬ世なりけり。

二類本の群書類従本系統は、西本願寺本系統(一類本)と定家書写本系統(三類本)との接触によって出来上った本だという片桐氏のご推断もあるが、確かに右の難解箇所を除いては、二類本が最も達意である。三類本には、何らかの事情による本文の脱落があるうか。

○「山賤はいへどもかひもなかりけり」の男の歌 この歌が、『古今和歌集』所収の伝承歌を踏まえての作者創作の歌であろう、という片桐氏の推測については前記したが、その古今集歌というのは、恋一・488番歌に

読人しらず

我が恋はむなしき空にみちぬらし思ひやれども行く方もなし。
とあるものである。

胸にあまるやるせなき恋の思いは、むなしき空(「虚空」の訳語で「大空」の意)に放てば消えて慰みもしようか。だが、わが深き恋情は放ちてもなお晴れてゆくべき方とでもない。「我が恋はむなしき空にみちぬらし」という、その『古今』の伝承歌の孤悲の哀れをその末の句に承けて、男の歌は、「大空に満ち溢れる程のわが思いも、山賤に等しいとるに足りない我が身のゆえに聞き届けてはもらえない。せめては空に満ちる我が恋情よ、筈となって、私の呼びかけの哀切に答

えては呉れないか」と言っているのである。前掲の如く、この段を語るに最も達意の二類本の第四句は「山彦空に」と作っている。「山彦」は山賤の縁語として一首の緊密にも与っている。

○「いかにせむ言ひ放たれず憂きものは」の女の歌。男の、中空に向けて嘆きするそのやるせない哀訴の歌にも、伊勢は依然として答えることをしなかった。男は、「いなとも、いかにとも、・・・」と責め立てる。私の情愛は或は執念きに過ぎるかも知れぬ。それならば、拒絶するなり、なじるなり、ともかく何か言って欲しい、と女の答を懇請するのである。そこで、伊勢は言う。

どのようにあなたにお答えしたらよいのでしょうか、言葉にそれと言いつ切ることにはかなわないのです。恋とは憂きもの、わが身ひとつも思いのまゝにならないのですから、と。

「身を心ともせぬ」は、自分(女)の身ながらも、そのわが身を自らの心の命ずるまゝに処することが出来ないの意。「世」は、「恋する身の上」或は「相思の男女の仲」の意。そして、二つの文に分け得る一首の後の文の「憂きものは身を心ともせぬ世なりけり」は、覚醒詠嘆辞の「けり」に統括されて、「思えば、恋とは思いのまゝにならないものだったのだ。それゆえに」と口訳されて、わが行為の不可能を言う前の文の条件句となっている。

これを三類本のように、男の歌とみるならば、幾度手紙を届けても、

女からの返事をもらうことの出来ない男は思い余って哀訴する。

不承知とも承知ともあなたからははっきりしたお言葉をいたゞけないまゝでおります。諦めなければならぬということ、そのことは分つてはいるのですが、恋とは憂きもの、わが身ひとつも思いのまゝになりませぬ。

という風にでもなろうか。これだと、「言ひ放たれず」の「れ」は、男を主語に置いた受身の「る」の未然形と解さねばならない。だが、そういう「受身」の用法は、これを女の歌として「れ」を「可能」とみる語法に比べて、かなりに不自然である。そのこと以上に不自然なのは、一首の意味の辻褄を合わせるために、右にみた如く、二つの文に分け得る歌の後の文が、前の文の条件句として働かねばならない筈の、その構文が完全に無視されてしまうことである。

こゝはやはり、女の歌とみるべきところである。そして、女は、或は伊勢は、「憂きものは身を心ともせぬ世なりけり」と嘆く下の句の愁わしき優婉を少女の時のそのまゝに、更に男の、「いなともいかに」と責める言葉をうけては、これもまた男の言葉をそのまゝに、「いかにせむ言ひ放たれず」と稚く返してゆく。だが然し、その愁わしき優婉も、また稚ない詠み口も、実はそのたおやかさの、そのゆえにこそ、それは男に対してする寸余の仮借もない峻拒であったのである。

○とばかり言ひて、やみにけり。この段をこれまでの所謂『伊勢日記』の文脈に直接するもの、特には仲平に対する処遇にそのまゝ連なるものであること、つまり伊勢の、接近して来る男に対する強かな拒絶の姿勢を定立させるために創作された段であることを稿者は述べ来た。その作者女房の創作意図は、「そひて言ひける」男に対して、「文おこすれど、返りごともせねば」また、「なほ返りごともせざりければ」と言う、当然あるべき「返事さ、えも」しない容赦のない黙殺と並んで、この条を閉じてゆく「とばかり言ひて、やみにけり」という、これもまた冷たく切つて捨てた物言いによって、いっそう鮮明化されてゆくようである。

○かくいふほどに、騒ぎ出で来て、兵衛佐なる人、解かれて但馬介になりけり。ところで、伊勢から男の数にも入れてもらえなかつたその人は、右大臣菅原道真の娘婿なる人物であつた。そのことは一類本では釈然としないが、二・三類本に依れば次の如く明らかである。

かかるに、時の大臣流され給ふ。婿にて兵衛佐より但馬介になされて流されけるを、ただにてはさしもおぼえでやみにしを、かく遠く流れゆきたるが、哀なる事と言ひたりければ、(二類本)かくて、世に騒ぎ出で来て、大臣も流され給ひける。賀にて、兵衛佐より但馬介にその人も流されにけり。たよりのありければ、

近くてはさ思ひて止みにしを、ここ遠くなりたまふが哀れることと言ひにやりたりければ、返りごとにかくなむ。(三類本)

この「騒ぎ」が、時の大臣(二類本)である右大臣菅原道真の筑紫への配流事件(ただし、『伊勢集』冒頭の物語的部分の時間の上で言えば、前段の温子女御の不例を寛平六年(八九四年)冬から、翌七年の早い時期のこととすれば、前段をそのまゝにうけてゆくこの段は、寛平七年(八九五年)中のことになるか。とすれば、時の右大臣は藤原良世であり、道真配流の昌泰四年(九〇一年)正月二十五日は、これより六年の後になる。——これについては、「評」に於いて後述する。——)であることもまた、二・三類本の記述から明らかである。

道真の失脚には、『大日本史』が語るような藤原時平側の讒言や陰謀とだけは言い切れない一面があつた。時平たちが作つた左遷の宣旨は、

右大臣菅原朝臣、寒門より俄かに大臣に上りて止足の分を知らず、専権の心あり。佞諂ねいせんの情を以て前上皇(宇多)の御意を欺惑す。詞は順にして心は逆、これ天下の知るところなり。

と言っている。これが藤原氏側の立場からする発言であつたにしても、当時、道真に対して、止足の分を知れ、分際をわきまえろと言つた声が朝堂に満ちていたことは、「天下の知るところ」であつたようである。彼は阿衡の紛議に係わつて宇多天皇の信任を得、八九〇年、讃

岐守より帰任の後、藏人頭、参議兼式部卿大輔、遣唐大使と累進し、寛平七年（八九五年）には、従三位中納言、ついで正三位権大納言となり、昌泰二年（九九九年）に至って右大臣となった。而もその間にあって、彼は、長女の衍子を宇多の女御に、次女を女官の尚侍に、いま一人の女を宇多皇子の齊世親王に納れてゆくという具合であった。

宇多治政にあらわれたミウチ的傾向に道真は大きく関係し、これが「止足の分」を越えるものとして、時平たちの反発をかうことになったものである。失脚の直接の理由とされたのは、道真が醍醐天皇（宇多皇子）を廢し、女婿の齊世親王（同じく宇多皇子）を立てようとして、上皇の同意をも得たということであったが、道真にそう言った野心が必ずしもなかったとは言い切れない、と史家は言う。（村井康彦氏『平安貴族の世界』）

『大鏡』の大臣列伝のうち、左大臣時平の条には、

さるべきにやおはしけん、右大臣の御ためよからぬ事いでき
て、昌泰四年正月二十五日、太宰権帥になしたてまつりてながさ
れ給ふ。このおとゞ子供あまたおはせしに、女君達はむこどり、
男君達はみな、ほどほどにつけて位どもおはせしを、それもみな
かたがたにながされ給ひて悲しきに……。

とある。その男君達は、父の事に連座して、長男大学頭菅原高視は土佐介に、式部丞景行は駿河権介に、右衛門尉景茂は飛騨権掾に、文章

特業生淳茂は播磨にと「みなかたがたにながされ給う」たのであった。

女君達の配偶者は、前記の、長女衍子が仕えた宇多天皇、また一女の納まった宇多皇子齊世親王以外必ずしもはっきりはしないが、伴信友の『表章伊勢日記附証』が考証するところによれば、『政事要略』巻二十二所載の、昌泰四年正月二十七日の左降除目のなかに「但馬権守源敏相左兵衛佐」の名を見出すことが出来るという。源敏相が道真の婿であったことを証す史料は見当たらないのであるが、二・三類本、特に三類本に、「聳にて、兵衛佐より但馬介にその人（伊勢に「そひて心ざし深き人」）も流されにけり。」とあるのが、この源敏相に比定される訳である。

○近くてはさもおぼえて止みにしを、○前掲本文に見る如く、この条、二類本では、「ただにてはさしもおぼえて止みにしを」、三類本では、「近くてはさ思ひて止みにしを」とある。

一・二類本の「さ（し）もおぼえて止みにしを」は「先に述べたように、男の数に入るものとも思わないで、『いかにせむ』（『いなせとも』）の歌を詠み贈って男の哀訴を黙殺したのだが」の意、三類本の「さ思ひて止みにしを」は「先に述べたように、男の数にも入れずにいて『いなせとも』の男の哀訴の歌にも返歌もせず、そのまゝに打ち捨て、いたのだが」の意となり、本文異同から来る文脈の相違はあるもの、伊勢が男の哀訴に一顧も与えなかったことに於いては同じで

ある。その男が、舅の事件に連座して、左遷の憂き目に逢い、遠く但馬国に流されてゆくことになる、続いて京に居るのならば依然として人数とも思わないのだが、今は「あはれなること」と言っている。持になったと言っているのである。二類本の「ただにてはさしもおぼえで止みにしを」の「ただにては」の条件句が、女の気持の転移を鮮明に語っている。

○「かけて言へば涙の川の水脈早み」の男の歌は、この男の歌は、秋山氏の指摘されるように、『古今和歌六帖』第四・涙川におさめられているのだが、この歌と同類の歌として、同集には、

つれづれのながめにまさる涙川袖のみひちてあふよしもなし

浅みこそ袖はひつらめ涙川身さへ流ると聞かば頼まむ

涙川いかなる水か流るらむなどわが恋を消つ時のなき

などの歌が並べられている。このうち、はじめの二首は、「作者、敏行、返し、業平」の贈答として載せられているのだが、これは、『古今和歌集』卷第十三・恋歌三の冒頭にも、617・618番歌の贈答歌として、なりひらの朝臣の家に侍りける女のもとにのみてつかはしける

としゆきの朝臣

かの女にかはりて返しよめる

なりひらの朝臣

の詞書を付して収載されているものである。そして、『勢語』もまた、

その第百七段に『古今集』と極めて近似した形で、これを収録している。

これらの歌は、それゆえ、歌自体としては広い意味での恋のこころを詠んだものであろう。この歌の所在を『古今六帖』に指摘された秋山氏は、その広義の恋歌が、ここでは、男が流罪に逢うという異常な経験をも季むことになる、一首の「涙川」の語は、「泣かる」「流る」の掛詞と縁語関係になっていて、恋の苦しみをうたう趣向に用いられるが、同時に、ここでは流罪の悲運への嘆きのこもる歌として、重層する意味をはらむ哀切な訴えとなっていると言われる。一首は、

お心にかけて優しい便りを頂きましたので、押え切れぬ私の涙の

川は瀧つ瀬となり溢れ出てまいります。それに付けても、そんな

優しい方と結ばれることもなく、異郷に流れゆく身を思えば、

我知らずまたも泣かれてしまうのでございます。

という。

ここに印象づけられるのは、かくも男を哀訴させる女の優越的な姿勢であると言えようとして、氏は続けて、もしもこうした悲境にあえぐのではなかったら、一顧だにできなかったに違いない男であるが、その慮外の不幸ゆえに同情する気にもなったが、それでも歌を詠み贈りはしなかったのである。一片の慰めの言葉によって、こうした哀訴の歌を男から引き出したのだが、しかし男を見下す、というよりは、や

はり男に背を向けている女は、酷薄なといおうか、驕慢といおうか、実はそうした姿勢において、男・女のつながりの次元を越えて屹立しているのだと言えようと言われるのである。

秋山氏の言われる、男の目に、そして恐らくは、同性の目にさへも、この「酷薄」とも「驕慢」とも映る伊勢の自立のその姿勢は、彼女に於いての特殊として、遂にその生涯の生となりおおすことが出来るのであろうか。次段はなお、本段と同一線上に語られてゆくのである。

【評】

「かくいふほどに、騒ぎ出で来て」（一類本）或は「かかるに、時の大臣流され給ふ」（二類本）に於ける年序不整の疑義について。

既に「注解」の項で幾度か触れて来た通り、『伊勢集』冒頭の物語的部分の時間の上で言えば、伊勢が仲平との破鏡の傷を癒すべく大和守であった父の許に滞在したのは、寛平三年（八九一年）の秋から翌四年の歳暮にかけてのことであった。（第二・三段）そして、温子の許への再出仕は寛平五年（八九三年）も明けてのこと、その年は、仲平・時平兄弟との応接で終り、（第四段）翌寛平六年秋には、時平との間に「吉野山」の贈答があり、その年も暮れる頃から翌寛平七年にかけて温子の病気に逢い、その騒ぎの中で、仲平との殆んど訣別を

予想させる贈答が取り交された。（第五・六段）その第六段に直接する本段は、とすれば寛平七年（八九五年）中のことにならうか。

それゆえ、「騒ぎ出で来て」（一類本）「時の大臣流され給ふ」（二類本）という道真左遷の記事に関係するこの一条が、寛平七年の本段の時点に位置するのは甚だ不審なのである。前述の如く、道真が「時の大臣」として、左大臣の時平と並ぶようになるのは、本時点より四年の後の昌泰二年（八九九年）二月十四日以降（『日本紀略』）であり、更にその道真が筑紫に配流されてゆくのは、昌泰四年（九〇一年）正月二十五日のことであり、本段の時点からは六年の後の事である。その配流事件は、宇多天皇が退位する寛平九年（八九七年）から数えても四年の後の事であり、伊勢が宇多天皇の「召し人」としてその情をこうむって皇子を産んだという後の記事（第九段）に於いて後述する。）やまた、「帝おりさせたまひて二年といふに、御髪おろさせたまひて」と語り出される昌泰二年（八九九年）十月二十四日の、宇多帝落飾（『日本紀略』）の記事（第十段）に於いて後述する。）とも、その年次は前後するのである。

この史実離れは、従来の所謂「伊勢日記他作説」の有力な根拠の一つとなつて来たものである。前第六段の「評」でも触れた如く『伊勢日記』を作者自作とする立場については、これを保留する稿者にとつても、この史実離れは看過出来ないところである。がさりとして、『伊

『勢集』の語手或は作者——稿者は、その一人に伊勢の侍女格の女房を想定している。これについては、『平安文学研究』第78輯に詳述した。

——が、その史実の年次を違えてまで、この段に、道真配流の一件を位置させたことについての必然的な事由を説明し得る名案が稿者にある訳ではない。ただ、そのことの示唆的な事由想定として、秋山氏が紹介される片桐氏の御考えは興味深い。

片桐氏によれば、本段末尾の「かけて言へば」の歌は、初期の定家本である中院本『後撰和歌集』恋三には、

文などおこせける男、但馬の国にまかりけるを、伊勢がとひ

におこせてはべりければ、藤原真忠が妹

かけていづる涙の川の水はやみ心づからや今はなかれむ

という形で存在しているという。「かけていづる」は「かけていへば」の誤写であろうとは誰も考えられるから、第三・五句に小異はあっても、歌は全く同じと言ってよさそうである。詞書にいう「但馬の国へ男が行ったこと」もまた一致しているのだから、両者の間に何らかの関係があることは否定できない。しかし、その詞書によれば、流された男と関係のあったのは伊勢ではなく、藤原真忠の妹であって、友人の伊勢がこの真忠の妹を慰めたのに対して、彼女が答えた歌という事になっている。一つの歌が、これを伝える伝承の経路によって二通りに伝えられるようになったとも考えられるが、『後撰集』の記

述と『伊勢集』の記述との相違を思い合わせる時、この歌の場合も、或は、右の真忠の妹に係わる歌反古が、中院本『後撰集』のような形で、伊勢自身の手許にあつて、これを『伊勢日記』の作者が改作利用したのではないかと考えられる。要するに一六番歌・一七番歌（片桐氏は三類本に依つておられる）を含めたこの段は、『伊勢集』の構想にそつて創作されたのではないか、と云うのが片桐氏のお考えの大意である。

無論、このお考えでも史実年次の前後不整の疑義が解消される訳ではない。ただ、そういう史実年序云々という事実の穿鑿にのみ汲汲たる考証の毒を越えた次元に於いて、伊勢の自立の生の、その営為が象られてゆく、或は、それを追尋してゆく作者女房の意図が形象化されてゆく、そういう風にこの一段を読むべきところであろうか。

第八段

（また、）（を、）（く）年を経

（同じ女、）年頃、言ふともなく言はずともなき

（よばふ）（こ）こら年

（男ありけり。返りごともしせざりければ、）年経にける

月に、) (言ひ・) (「見つ」とぞ

を、などか見つとだにのたまはぬ」とはべりければ、……

言ひたりける。それより) (をば) (ぞ……)

……この女・「見つ」となむ名をばつけた

りける。立ち返り、男、

一六、

一六、立ち返りふみゆかざらば浜千鳥跡見つとだに君言はましや。

女

・返し、

一六、

一六、(す)・

二〇、年経ぬること思はずは浜千鳥ふみとめてだに見・べきものは。

(の) (の詠みたりける)

夏、・いと暑き日盛りに、同じ男、……

三〇、夏の日「燃ゆる我が身のわびしさにみづこひ鳥の音をのみぞなく。

三、夏の日「燃ゆる我が身のわびしさにみづこひ鳥の音をのみぞなく。

(しもせず・)

返りごとなし。

【通解】

(道真公の娘簪にあたる方と相前後して、) 主人伊勢には、これは、

確と求婚すると言うでもなく、さりとして求婚しないでもないという、

本当にとらえどころのない、それでいて執拗に言い寄っておいでの方

がございました。(そういう曖昧なお方でしたから、主人は) 少しも

相手になさらずにいましたところ、(その方は)「あなたに思いをお

伝えしてからずいぶん久しくなりますものを、せめて私の手紙を『見

た』とだけでも、どうしておっしゃってくださいならぬのか」と怨じて参

りましたので、(主人は、あの方の言われるまゝに、「あなたのお手

紙は見ました」とだけ言っておやりになったようでした。)

(そんな事があってから) 主人は、その方の事を擲掬なさって、「見

つ」という渾名をつけて呼ばれたようでございます。(一方、待ち焦

れていた主人の返事をもらった) あの方からは、即刻、(こんな歌が

届いたのでございます。)

すぐさまお便りしなければ、筆跡を「見つ（見た）」というだけでも、あなたはおっしゃってくださるでしょうか、おっしゃってくださるはずがありません。だからまたすぐにお便りしたのです……。

それに返した（主人の歌は、）

何年もの間、お手紙をいただいているということをお知らせなければ、手紙をとどめておいて、それに返事を書いてあなたにお見せしたりするでしょうか。

（というものであったそうでございます。）（そんなことのあった）夏のこと、ひどく暑い日盛りに、同じあの方から、

夏の日のように、恋ゆえに燃ゆる我が身の苦しさから、水恋鳥が鳴くように、「みつ（水）」とおっしゃってくださるあなたを求めて、独りで声をあげて泣いておるのでございます。

（そのような歌が届きましたが、それに、主人はもはや）ご返事を書こうとはなさいませんでした。

【注解】

○同じ女、年頃、言ふともなく言はずともなき男ありけり。 本段冒

頭的一条であるが、ここは、三類本の本文が最も達意である。それは、

また、同じ女を、言ふともなく言はずともなく年を経てよばふ男ありけり。

とある。これは、前段の冒頭に、

また、人数とも思はぬに、心ざし深き人ぞそひて言ひける。

とあった一類本の本文のバリエーションである。「また」は並列追加の意をもってそのまま前段に対応し、その「また」は「そひて」に対応する「年を経て」を隔て、これも「言ひける」に対応する「よばふ男ありけり。」に係ってゆく。藤原仲平・時平兄弟、そして、右大臣菅原道真の娘聲の源敏相と想定される第三の男に次いで、またもや伊勢に恋情深き男の出現を語る、これは四たびの段である。ただ、この男が、藤原兄弟とも、また特に源敏相とも異なるのは、「心ざし深き人ぞ」に対応するところが「言ふともなく言はずともなく」とあって、何年も求婚し続けているにしては、その態度が甚だ曖昧な、求婚されている当の伊勢にとっても何とも焦立つ持て扱い難い男なのであった。この男は、いったい誰なのか。

○返りごともせざりければ、「年経にけるを、などか『見つ』とだにのたまはぬ」とはべりければ、その存在が何とも勘に触るその

男。ゆえに、伊勢は男の「年頃」の求愛に対しても全く黙殺を通して来たのだが、実はその男は、『平中物語』の主人公の平貞文であった。

前段の「心ざし深き人」は、その段の後半に来て、「かくいふほどに、

騒ぎ出で来て」と転調する文脈の中で、その源敏相なる固有の人物名が明らかにされて来るとい語口であったが、本段では、この『見つ』云々を含む（これは、一・三類本とも同じ）第二条の表現と、本段の末尾に出る二・二番歌（二類本では、二・二番歌、三類本では、二・二番歌）の「夏の日の」の歌と、更に、これは二類本だけに見えるのだが、その二・三番歌の「いたづらに」の歌によって、この段が、『平中物語』に於いて「平中」こと平貞文と伊勢との交渉を語った段に深く係わっていることを知り得るのである。

その『平中物語』の第二段は、伊勢と平中との関係を、平中の側から語っているものだが、その本段に相当する部分のみを挙げると次のごとくである。

また、この男の、懲りずまに、言ひみ言はずみある人ぞありける。それぞ、かれを憎しとは思ひはてぬものから、返りごともせざりければ、「この、奉る文を見たまふものならば、たまはずとも、ただ『見つ』とばかりはのたまへ」とぞいひやりける。されば、「見つ」とぞいひやりける。男やる。

夏の日に燃ゆるわが身のわびしさにみづこひとりの音をのぞみなく。

また、返りごと、

いたづらにたまる涙のみづしあらばこれして消てと見すべ

きものを

かういひかはしつつ、ほどは経ぬれど、……（後略）

これを見て分かる通り、『伊勢集』の本段（特には、右校異に挙げた通りの三類本の本文）は、一九・二〇番歌（三類本では、一八・一九番歌）を除いては、『平中物語』に、その詞書・歌ともに酷似するのである。前述の通り、「いたづらに」の歌も、二類本には見える。片桐氏は更に、この『平中物語』の冒頭の書き出しに触れて、『伊勢集』の本段は、これに倣ったものではないのだろうか、と言われる。即ち、『平中物語』には、「おなじ男」（第三段）、「また、このおなじ男」（第四段・第十段・第十四段・第二十二段）、「このおなじ男」（第二十一段）などと、「おなじ男」の用例が多いのである。『伊勢集』のこの段の「また、同じ女」（三類本）という書き出しを見ると、『平中物語』を意識して、こここの『伊勢集』の段が作られているのではないか、という気がする。つまり、『平中物語』は『伊勢集』より古いのではないかと思われる。と氏は言われるのである。

ところで、片桐氏が『伊勢集』の先行文学の一つと推定される『平中物語』の主人公平貞文（或は、定文とも）については、『古今和歌集』の238番歌に、

寛平御時、藏人所のをのこども、さが野に花みんとてまかりたりけるととき、かへるとてみなうたよみけるついでによめる

238 花にあかでなにかへるらんをみなへしおほかるのべにねなまし

物を。

とある。また、279 番歌には、

仁和寺にきくの花めしける時に、うたそへてたてまつれとお

ほせられければよみてたてまつりける

平さだふん

279 秋をおきて時こそ有りけれ菊の花うつろふからに色のまされば

とある。前の歌は、「寛平御時」、即ち宇多天皇の盛時に、貞文が帝に近侍していた頃のものとして読めるし、後のものは、仁和寺に御遷御になつた帝の落飾の後も親しく拝眉して、帝のなほ醍醐帝の御後見としてあられる御稜威を賀したものと解される。

貞文が、かく宇多天皇に親しくお仕えしていたのであれば、伊勢とも交渉を持つ機会は容易に訪れたはずである。その伊勢から貞文の許には、繁く通わす文にも一度の返書とて届くことがない。そこで男は、なぜに「見つ」とだけでも、つまり私の手紙を見ただけでも、なぜおっしゃってはくださらぬのかという。その男の懇願に対して、女は、つまり伊勢は、ただ「見つ」とだけ返事をしたというのである。(傍線部の訳は、二・三類本の本文に相当する。)右のような経緯の上に立って、一九番歌と二十番歌(三類本では、一八番歌と一九番歌)の

贈答は、はじめてその意味を完全に満たすことが出来る。こゝが、一類本の本文のまゝでは、一九番歌や二十番歌にはつながらない。こゝは当然のことながら、三類本にある「こゝら年月に、などか見つとだにのたまはぬと言ひければ、見つとぞ言ひたりける。」(二類本もほゞ同文である。)とあるのに従うべきところである。一類本には、「見つとぞ言ひたりける」に相当する詞句の脱落を想定すべきであろう。

○この女、「見つ」となむ名をばつけたりける。この一条、二・三類本では、

それより此女を(ば)「見つ」とぞつけたりける。

となっている。これだと、一類本では、「女が男に」、二・三類本では、「男が女に」それぞれ「見つ」という渾名をつけたということになる。両者に於いて事情は逆になっているが、後の二番歌の「水こひ鳥」が「水をほしがる鳥」の意と『見つ』を恋慕う鳥の意を掛けていると考えれば、「水こひ鳥」が男のことであり、「見つ」は女のことを言っているとみるのが自然である。(片桐氏訳注)『平中物語』の中では、それを男に対してにして、女に対してにして、渾名をつけたと言う記述は見当たらないのだから、二・三類本は、『平中物語』に於いて先行したと推定される二番歌に引かれて、右のように「見つ」を、男が女につけた渾名であったというような記述をするこゝになつたのである。

だがしかし、こゝは、せめて「見つ」とだけでも懇願する男に対して、女はただ、その願いのまゝに「見つ」とだけ言ってやった。その上に、男の懇願のその言葉をそのまゝに渾名として男にかぶせて、笑いのめしてやる。そういう一類本の、男に対する軽いあしらいを述べる本文の方が、「年頃」の求愛に対しても、一顧の「返りごともせ」ずに黙殺して来た男に対する処遇としてより適わしいのではないか。それでは、後の二二番歌の、寓意的な人間関係を詠み込む歌意と打ち合わせことになりはしないかという疑義も、「夏の日に燃えるようにあなたを恋こがれている我が身の苦しきから、水恋鳥が鳴くように、「みつ（水）」とおっしゃるあなたを求めて、ひとりで声をあげて泣いておるのでございます。」（秋山氏口訳）と、第四句に掛けてある詞の「見つ」を「水」に転移してゆく修辞と読んでゆけば、問題は解決しそうである。

○「立ち返りふみゆかざらば浜千鳥」と「年経ぬること思はずは浜千鳥」の贈答。この贈答歌が共有する「浜千鳥」は、贈歌では、

「あと」（足跡と筆蹟を掛けている）、答歌では、「ふみ」（踏みと文を掛けている）の枕詞の役割を果している。浜の砂を千鳥が踏んだ跡を筆跡に見たてたのである。中国でも鳥の足跡からヒントを得て、文字が生まれたという故事がある。（片桐氏注）

ところで、男の贈歌を秋山氏は、

あなたがご返事くださらなかった時、それに懲りずにすぐさまたくしがお手紙を差し上げなかったなら、あなたは「見つ」とさえもおっしゃりはしなかったでしょうに、の意。

と解され、一方、片桐氏は、すぐさまお便りしなければ、筆跡を「見つ（見た）」というだけでも、あなたはおっしゃってくださるでしょうか、おっしゃってくださいませんがありません。だからまたすぐにお便りしたのです・・・と口語訳されている。お二人の解釈には、贈歌の初二句に見える、男の「立ち返り」女に「ふみ」を贈る行為の行なわれた、その時点をどこに置かか微妙な違いがある。秋山氏はこれを、男の度重なる求愛の手紙にも、女からは一顧だに与えてもらえなかった長い失意の時間の頃の事と見、片桐氏は、女のその久しい無視の果にやっとの思いで、「見つ（見た）」とだけは言ってもらった今の時のその時点の事と見ておられる。従って、秋山氏の解には、長かった己の行為が、今報われた男の喜びが溢れている。だが、これに対する女の「年経ぬる」の返歌を、

長い間のお志を思えばこそ、私はあなたのお手紙を手元にとどめて拝見したのですよ、の意。

とされる秋山氏は、「見つ」とだけの返事にさえ歡喜する男の言葉を引き取って、あなたの熱意に免じて手紙を見るだけは見たと答えてい

るのだが、これはいかにも恩きせがましい、そして、相手に対して決して心を開いてはいないのである、と言われる。

これを片桐氏は、「見つ（見た）」とだけにしろ、待つに久しかった女からの「返りごと」を今こそ得た、この機会を逃してはあなたとの仲は絶えてしまう、だからまた直ぐにお便りしたので、と今の好機を盾にとって、男は女との仲らしい更なる継続を哀願する態度と見ておられる。稿者は片桐氏の解に従いたい。片桐氏は女の返歌を、何年もの間、お手紙をいただいているということを思わなければ、手紙をとどめておいて、それに返事を書いてあなたにお見せしたりするでしょうか。

と口語訳される。この度の返事は、「何年もの間、お手紙をいただいて」いたからこそこのこと、それを思わなければ返事など書きますものか、と今の好機に便乗して来る男に図に乗るな、と言っているのである。それは、相手に対して、「いかにも恩きせがましい、そして決して心を開いてはいない」と言う陰微な対応であるよりも、今の好機に図に乗って来るへつらい顔の男への正面からするあからさまな拒絶である。それは先の、せめて「見つ」とだけでも懇願する男に対して、女はただその願いのまゝに、「見つ」とだけ言ってやった。その上に男の懇願のその言葉をそのまゝに渾名として男にかぶせて笑いのめしめてやる、そういう同性の目にさえも酷薄とも映るその対応に連なるも

のである。更に、その酷薄さの最たるものは、片桐氏が試解された、女の返歌の口語訳の、秋山氏のそれとの違い（傍線の部分）に明らかのように、三類本本文がその女の返歌に於いて語る「見すべきものか」の一句である。

これについて、片桐氏は、女の返歌の末の句「見すべきものか」の「見す」は、誰に見せるのかわかりにくい。西本願寺本（二類本）の「見べきものか」（二類本も同じである。）の方が「自分が見るだろうか、見はしない」の意で理解しやすいが、当時、相手の手紙の余白に返事を書くことが多かったことを思えば、「あなたからの文を留めておいて、その余白に『見つ』と返事を書いてあなたに見せるでしょうか」と解せる三類本の方がよいのではないか、と言っておられる。綿々たる男の哀願の文の余白に、ただ「見つ」とだけ書いて送り返した自分のその行為を今改めて、容赦のない返歌の言葉にして断っているのである。それは、女の、或は伊勢の、「言ふともなく言はずともなき男」の、執念き、それでいて優柔の恋情に対する断固たる拒否の姿勢であったのである。

○「夏の日の燃ゆる我が身のわびしさに」の男の贈歌。先に述べた通り、群書類従本系統（二類本）の本文では、この男の贈歌を含めて、本段の末尾は次のようになっている。

夏のいと暑き日盛りに、同じ人

三夏の日にもゆる思ひのわびしきはみつにひかりの音のみぞなく。

返し

三いたづらにたまる涙の水ならばこれして消てと言はましものを。

贈歌の第四句は、『平中物語』では「みづこひどりの」とあり、また上の句にも『平中』とは小異があり、更に返歌の第三・五句は「水しあらば」「見すべきものを」とこれも小異を残しながらも、この二類本の末尾は、その構成に於いては、『平中物語』にそのままなのである。この末尾に於いて、一・三類本には見えない「いたづらに」の歌は、後続家集では一・三類本とも324番歌として所収している（ただし、第二・三句が、一類本では「たまる涙のつつまれば」、三類本では「つもる涙のつつまれば」となっている）から、『平中物語』が男寄りに書かれているにしろ、この一首の存在は十分にあり得たものと思われる。

二類本は、それをそのままに伊勢集の文脈の中に取り入れているのだが、これを欠く三類本に依られる片桐氏は、この一首が後続家集に見えるところから、物語的部分に限らず、貞文とのやりとりを物語る資料が伊勢の側にもっとあったということである。しかし、「いたづらにつもる涙のつつまれば」——私の方でもむなしくたまってゆく涙がもし包むことが出来るのなら——「これして消てと言はましものを」

——これを使ってあなたの心の中の燃ゆる火を消しなさいと申しますのに——という歌は、この場面に入る余地がない。『伊勢集』の物語的部分では、男はあくまで軽くあしらわれる存在として設定されているから、その歌は入りようがなかったのである、と言われている。一類本に依られた秋山氏も、『伊勢集』の意図する物語的設定に於いては片桐氏と同じ方向の立場を取られている訳だが、氏は更に、二類本にのみ見える「いたづらに」のこの歌は、後記挿入と断定され、そこに後人の賢しらを見ておられる。『伊勢集』の作者女房にとって、この十分あり得たはずの一首の存在は、実は、その物語としての設定を完全ならしめるべき意図を阻害するものの他の何ものでもなかったという訳である。

○返りごとなし。第八段を結ぶ一条である。女の、或は伊勢の、貞文に対する簡潔を極めた対応のこの一条が、第七段に続く伊勢の、拒絶に於いて定位する自立の姿勢の、そのすべてを語っている。稿者はここでも、秋山氏の言葉を借りて、伊勢のその姿勢を特定させて頂くことにする。氏は、次のように説かれている。

歌という言語表現は、これによって他者と深くかわり、かわることによって相許しえない自己のありようを確定する営みであった。それなくしては女が自立することの出来ない、切実な生活的言語であり、従って他者の歌に対してわが歌を番えることは、

それが擲論・嘲弄・反発などさまざまな姿態ながら、要するに切り返すことよってみずからの姿勢を自他に確認する術法であったと言えよう。それなのに、「夏の日の」の男の歌には「返りごとなし」と、女が沈黙をもって応じたというのはどういうことか。

先に私は、詞書の加担による『伊勢日記』の文脈形成についてふれた。「……などいへど、文ばかりをなむ通はしける。逢はざりけり」「……いふを、あはれと思ふ。されど逢はでやりつ」

(第四段・稿者注)「文おこすれど、返りごともせねば」(第七段・稿者注)などの筆法であるが、この「返りごとなし」も同類とみてよいだろう。伊勢の相手に対する沈黙は、相手との贈答による拒否と同位相、というよりはそれのよりきびしい態度表明であり、男の歌が強烈な訴嘆をそこに転位して目もあやに完結するものであればあるほど、女のがわの黙殺は積極的に選択された行為として意義づけられ、『伊勢日記』の文脈形成に重くかかわることになるのである。

こう説かれる氏は、室伏信助氏が『伊勢日記』にたどられた伊勢の人生の推移を押さえつつ述べておられる、「伊勢が、人間存在の根本問題を、抒情詩の生命の内側で解決しようとせず、情念の復讐のかたちで遂行している姿を見出す」と言われた言葉のその意味するところを、伊勢の、対男性に於いて見せるこの黙殺或は沈黙の行為の中に読

み解こうとしておられるのである。けだし、伊勢に於ける「黙殺」或は「沈黙」の行為は、拒絶に於いて定位する自立の姿勢と背中合わせの、男に対する、いわば情念の復讐のかたちでもあった訳である。だがしかし、それが、情念としての復讐という次元を出でないまゝには、伊勢に於ける真実の自立の生は、その展望を見せて来ることではないのではないか。第九段以後に見えて来る伊勢の生のそのありようを視野に入れた時、稿者は、前段の「注解」の終りの条で述べたこの言葉を、今また少なからぬ危惧の念と共に再びこゝに繰り返さざるを得ないのである。

【評】

「この女、『見つ』となむ名をばつけたりける」男について。

本第八段冒頭の一条の「また、同じ女を、言ふともなく言はずともなく年を経てよばふ男ありけり」(三類本)は、前第七段のやはり冒頭の一条の「また、人数とも思はぬに、心ざし深き人ぞそひて言ひける」(一類本)のバリエーションであり、従って、この第七段の対源敏相と第八段の対平貞文との話柄は、同時進行の事件であったろうことは、既に「注解」の項で述べた。とすると、これも、第七段の「評」に於いて述べた通り、伊勢が時平と「吉野山」の贈答を取り交したの寛平六年(八九四年)秋のこと、そして、その年も暮れる頃から翌

寛平七年の早い時期にかけてと覚しき頃に、伊勢は主人の温子の病気に逢うことになる。(第五・六段) その第六段に直接する第七段、更には第七段に並行する本第八段は、とすれば寛平七年(八九五年)中のことなるうか。

その頃「平中」こと平貞文(定文とも)は、二十歳代後半(貞文の生年は不明だが、萩谷朴氏は貞観十三年(八七一年)頃と推定されている。没年は延長元年(九二三年)九月二十七日、萩谷氏の推定年齢では五十三歳位ということになる)で、寛平七年には19歳から24歳位と推定される伊勢より数歳年長ということになる。時に彼は右馬権小允であった。

貞文と親交のあった貫之が、その撰集の中枢にあった『古今和歌集』は、貞文の歌を九首おさめているのだが、その中、雑歌下の964と965に並べて採られている二首の歌は、彼の失意を詠じたものである。

その中の一首、964番歌は、
うき世にはかどさせりともみえなくになどかわが身のいでがてに
する。

と歌う。それは、失意の中に在って、なおその俗世を捨てかねている凡俗の身の嘆きであり、詞書には「つかさとして侍りける時よめる」とある。これは、寛平七年の頃に藤原時平の讒口にあつて、右馬権小允の官職を解かれた時のものと読める。やがて、祖父の茂世王の妹で

あり、宇多天皇の母后でもあった光孝女御の班子女王のとりなしで復官することになるのだが、彼は桓武天皇皇子仲野親王の曾孫(桓武天皇——仲野親王——茂世王——好風——貞文)という王家流の貴種の誇りもあつてか、爾来、世俗になじむことをしなかつたようである。

多くの説話の主人公となり、伝承の中で自在に生きた平中の多彩な生涯は、このあたりにその始発の原点があつたように思われる。その枚挙にいとまない伝承のうちで、『今昔物語』巻第三十に第一話としておさめられている「平ノ定文、假借本院侍従語」の説話の大要は次の如くであつた。

昔、京に字を「平中」と言つた者で、兵衛ノ佐平ノ定文と言う者がおつた。時に本院の大臣(藤原時平)の家に若い女房で、侍従の君というのがいたのだが、定文はその女房に恋慕して、年頃を言葉に尽くせぬ程に言い寄るのであつた。だが、
侍従消息ノ返事ヲダニ不為ケレバ、平中歎キ侘テ、消息ヲ書テ遣タリケルニ、「只『見ツ』ト許ノ二文字ヲダニ見セ給へ」ト、書いて使に持たせた。間もなく使が帰つて来たので、

其ノ返事ヲ急ギ取テ見ケレバ、我が消息ニ「『見ツ』ト言フニ文字ヲダニ見セ給へ」ト書テ遣タリケル、其ノ「見ツ」ト
言フニ文字ヲ破テ、薄様ニ押付テ遣タル也ケリ。

平中は、かくもおろそかな扱いを受けて、そのあまりの侘しさに

一度は思いを断とうとするのであったが、侍従の恋しさはやはり押えようがない。

折から五月雨が、ひまなく降る夜が続いた。

然りトモ今夜行タラムニハ、極キ鬼ノ心持タル者也トモ、哀

レト思シナムカシ。

と、音しきりなる雨を冒して本院に行く。そこで、かねてから侍従への取りつきをして呉れていた女童の機転で、女の頭や髪を掻き捜るまでになりながらも、女の逃げの口実にだまされて、またもや思いを遂げることが出来なかった。この上は、女の我慢のならぬ嫌なところを見て、それで諦めることにしようと思いつく。侍従の局のあたりを伺い歩いて、

女ノ筥（便器）ニ為人ラム物

を奪い取ってしまう。平中が、おづおづ筥のふたを開けてみると、強い丁子の香がブンと匂って来た。筥の内には薄香の色をした水が半分ばかり入っている。また大指の大きさ位で黄黒ぼんだもので長さが二・三寸ばかりのものが三切ばかり丸い塊になって入っている。

「思フニ然ニコソハ有ラメ」ト思テ見ルニ、香ノ艶エモイハズ馥シケ

レバ、木ノ端ノ有ルヲ取テ、中ヲ突差シテ、鼻ニ充テカゲバ

艶ズ馥シキ黒方ノ香ニテ有リ。惣ベテ心モ不及ズ。「此レハ

世ノ人ニハ非ヌ者也ケリ」ト思テ、此レヲ見ニ付テモ、「何

カデ此ノ人ニ馴睦ビム」ト思フ心、狂フ様ニ付ヌ。筥ヲ引寄

セテ、少シ引飲ルニ、丁字ノ香ニ染返タリ。亦此ノ木ニ差テ

取上タル物ヲ、崎ササテ少シ嘗ツレバ、苦クシテ甘シ。馥シキ事

無限シ。

心疾き平中は、すべてを諒解するのだが、かくも床しき侍従の心ばへに、

「何デカ此ノ人ニ不会デハ止ナム」ト思ヒ迷マドレケル程ニ、平中病

付ニケリ。然テ惱ケル程ニ死ニケリ。

これは、よく知られた平中説話であるが、こゝでは例の「見つ」問答が、平中と本院の侍従との説話に化して、伊勢の名は完全に消え去ってしまった。同じ女流歌人として、同時代を生きた小野小町や和泉式部が多様な伝承の中で、或る意味では、その生涯の振幅を広げて行っているのに対して、伊勢の場合、その逸話として残るものは、「歌業や歌名を伝えるものが殆んどで、その数奇の生涯も興味的に扱われた例は稀にしか見当らない」（関根慶子氏）のである。そういう、伊勢を歌聖として崇拜する後代の、或は伊勢偶像化の心情が、「見つ」問答を、『伊勢集』や『平中物語』の内部にとゞめることで、その圏外に出でしむることを肯んじなかったのでもあろうか。

そうした疑義はともかく、恋情に惑うて遂には病みて死に至る、そ

の男の直情を述べる右の平中説話は、一つの男の生きざまを語って多分に魅力に満ちてはいないか。平中の歌人としての活躍は括目すべきであって、現存する和歌は百十四首。延喜五年四月二十八日の「平定文歌合」、延喜六年某日の「句題和歌」などの歌合を主催し、『古今和歌集』以下の勅撰集歌人としても知名の人である。少くとも、『古今和歌集』の九首が語る平中は、その生を真当に生きているのである。その彼をしてなお、恋の惑いに於いて語る平中説話は、世の平俗を出でて生きる男の一途の生のロマンを指向したものでなかったのか。

とすれば、そういう一途の生に賭ける貞文を擲掄と黙殺との対応で終始してゆくこの段に於ける『伊勢集』の物語設定は、人間としての生の振幅に於いて、伊勢を矮小化している。という、そういう、伊勢の自立を語ろうとする『伊勢集』の物語のその意図を裏切る事実がこゝにあるということもまた、否み得ないような気がするのである。

(未完)

付記 本稿の成稿に当って、秋山虔氏の『伊勢』(集英社、昭和60年8月刊)及び、片桐洋一氏の『伊勢』(新典社、昭和60年8月刊)から、多くのご教示とご示唆をいただいたのは、先の『伊勢日記私注』(一)(二)(三)の場合と同じである。

高松短期大学研究紀要

第 18 号

昭和63年 3月15日 印刷

昭和63年 3月25日 発行

編集発行 高松短期大学

〒761-01 高松市春日町960

TEL (0878) 41-3255

FAX(0878) 41-7158

印刷 高東印刷株式会社

高松市東山崎町596番地